

国立病院総合医学会 に参加して①

4階北病棟 助産師
日野 智子



私は、11月9日から10日に神戸で開催された国立病院総合医学会に参加してきました。

学会には全国の国立機構の病院が一斉に集まりました。各施設がそれぞれどのような研究をされているのかを知ることができ、助産師、看護師としてだけでなく多職種の取り組みについても知る良い機会になりました。また、施設により規模や環境・システムなどが違うのでいろいろな視点から研究をされていることが分かりました。

今回私は、産科・婦人科疾患の診療という領域において「出生後、予期せぬ治療が必要となった入院新生児をもつ母親の思い—テキストマイニング分析から—」という演題で口演発表を行いました。このテーマで看護研究を行った理由は元気に生まれた赤ちゃんが出生後に何らかの治療が必要となった場合、お母さんたちは赤ちゃんや私たち医療者に対してどのような思いを持っているのかを知り、看護ケアに生かしたいと思ったからです。

この看護研究を通して、赤ちゃんに治療が必要となった場合のお母さんたちの思いは「不安」や「驚き」、「期待」、「安心感」、「遠慮」などが挙がりました。また、

スタッフがかけた言葉や関わりもお母さんたちの思いに影響していることが分かりました。産後、お母さんはこのような思いを持って赤ちゃんに向き合い、過ごされています。約1週間という産後の短い入院期間の中で私たちが支援できることは限られているかもしれませんが、今回の研究でわかったお母さんの持つ思いをきちんと理解し、その思いに寄り添いながら退院に向けての生活を少しでも安楽に送れるよう看護していくことが大切であると改めて感じました。

私は、院外の学会での研究発表は初めての経験だったのでとても緊張しました。しかし、論文作成や発表にあたり準備段階でも研究内容を分かりやすくまとめたり、他者に伝えるといった点でとても勉強になり、良い機会を与えていただいたと思っています。

また、少しですが神戸の街も観光できリフレッシュの時間を過ごすことができました。

今回の学びや経験が生かせるよう助産師として、今後関わるお母さんや赤ちゃんたちそれぞれの思いに沿えるような看護が提供できるよう努めていきたいです。



国立病院総合医学会 に参加して②

薬剤部 調剤主任
山中 洋



過日、神戸国際展示場・国際会議場にて開催されました、第72回国立病院総合医学会に参加してきました。

「多様性のなかに個が輝く-私たちの医療を推進します-」をメインテーマに、疾患のゲノム多様性に対応する最先端医療はもちろん、一人ひとりの違いに対応した、手術、看護、ケア、指導、リハビリテーション、緩和医療、終末期ケアと、今まさに私たちが目の前の患者さんに対して一生懸命行っていることを共有し、他施設の取り組みについて、多職種間で活発に情報交換を行う場となりました。

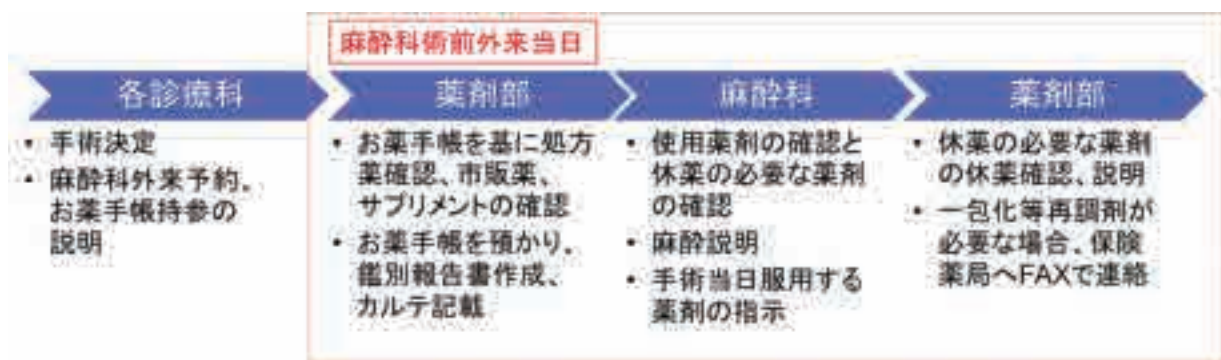
薬剤部業務においては、手術室や救急医療での薬剤師の取り組みや、入退院支援や外来がん化学療法、術前外来など外来患者さんを対象とした薬剤師の取り組みが各施設でも進められており、その取り組みについて学ぶことができました。

私は今回、2018年2月より当院薬剤部において、手術前に麻酔科受診をする外来患者さんを対象に、薬剤師術前外来を開始した、その取組について、「薬剤師術前外来における術前休薬管理に対する取り組み」として、発表を行いました。

手術予定の患者さんにおいては、使用中の薬剤についての情報収集、休薬が必要な薬剤の確認と服用管理は、手術を予定通り安全に実施するために必須であります。以前は麻酔科外来で行っていた薬剤についての情報収集を、薬剤師が麻酔科医師の術前診察前に薬剤情報を収集し、診察後に休薬が必要な薬剤の服用確認と患者さんへの説明、一包化からの抜き取りなど再調剤の可否について薬剤師が確認し、患者さんに指示通り服用できるよう支援しています。

休薬の必要な薬剤の休薬忘れによる手術延期を防止するため、薬剤師が手術予定の外来患者さんの使用薬剤を確認し、患者さんの病態や術式に合った休薬・継続指示の確認、アドヒアランスや調剤方法を確認することで、休薬の必要な薬剤が指示通り確実に休薬できるよう支援し、今後も手術を予定通り実施できるよう手術予定の患者さんへの薬剤管理に努めていきたいと考えます。

最後になりましたが、薬剤師術前外来の運用に日頃からご理解・ご協力いただいています医師、看護師、その他院内スタッフをはじめ、浜田薬剤師会の保険薬局の先生方に御礼申し上げます。



<薬剤師術前外来対応件数> (2018年2月～9月)



<休薬の必要な薬剤の指示確認状況> (2018年2月～9月)

